

忙 申 閑

どこで誰から聞いたのか全く思い出せないが、自身の生き方の土台にしている言葉がある。

「あなたが生まれた時、あなたは泣いていて、周りの家族は笑っていたでしょう。だから、あなたが死ぬ時は、あなたが笑っていて、周りの家族が泣いてくれるような人生を送りなさい」。

この言葉を知ったのは恐らく中学生の時に、当時は良いことを言っているとは思っていたものの、深く理解もせず「普通に生きていけば自然と達成されること」程度にしか受け止めていなかった。そんな薄い記憶だったこともあって長らく忘れてしまってい

たのだが、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）を学んだ時に、ふと思い出した。

昨今、医療現場では多くの苦痛や後悔を抱えて最期を迎える方や、親の病気や死と向き合うことを避ける家族への対応に苦慮することが多くなり、その対策としてACPの重要性が認知されてきている。ACPは、将来の医療やケアについて患者自身が家族や医療者と繰り返し話し合うことだ。単に「延命治療の希望の有無」を尋ねるのではなく、患者の価値観、人生観、そしてどのような最期を迎えたいかという願いを尊重し、共有していくことを目指すプロセスであり、冒頭の言葉にある終末像にマッチしていると私は感じた。

ネイティブアメリカンの教え

広報委員 三上 聡司

自身の人生訓にしようと思い、うろ覚えだった細かな表現などを調べたところ、これはネイティブアメリカンの一部族であるチェロキー族に伝わる故事で、正確には「生まれた時、あなたは泣き、世界が笑った。だから死ぬ時は、あなたは笑い、世界が泣く人生を生きなさい」であることが分かった。対象が「世界」とやや大きい気もするが、祝福されて生まれてきて、自分は満足し、周りに惜しまれる最期を迎えられるのであれば、確かに幸せなことだろう。

大阪府ではACPを用いた救急活動指針が示されているが、適切に機能した事例は多いとは言えない。ACPでは医療者が患者と患者家族の価値観を尊重し、ともに意思決定を行うという役割を担っているわけ

だが、患者の意思を尊重しつつも、「本人に負担をかけたくない」「まだ言いたくない」という思いがある。故に、終末期の話し合いが先延ばしになっていることが要因の1つと言える。また日本人が「死」をタブー視し、避けたいと考えているからかもしれない。しかし、冒頭の言葉のように、死は生の自然な一部であり、その準備をすることが残された生をより豊かにし尊厳を保つことにつながる。皆がそう考えられるようになれば、我々も府民一人ひとりが安心して最期を迎えられる社会を築いていくことができるのではないだろうか。